

書 評

上田 礼子 著

発達ダイナミックスと地域性—岩手/東京/沖縄'72-'97

万歳登茂子 (和田内科病院・名古屋市)

タイトルの「発達ダイナミックス」とは、人間の発達は可塑性あるいは強靱性を備えていて、たとえ初めは遅れていても、その後の経過で遅れをとりもどしたり、親子関係に種々の変化をきたしたりするダイナミックな性質、と著者はとらえている。

1972年から1997年までの非常に長期にわたる数多くの調査をまとめたものである。著者は本著の中で、発達の縦断的研究という言葉を使い、従来日本においては、横断的研究が主であったと述べている。

一つの調査・考察から、疑問が生じ、その疑問を解明するために次の調査を施行し、考察を加える。するとまた次の疑問が出てくる。そしてまた調査をし、と著者の探求心の旺盛さに驚かされる。

そのスタートは、著者が日本に紹介した日本版デンバー式発達スクリーニング検査である。このスクリーニング検査で、順調に発達していると経験上判断されたのに「リスク児」と評価される子供がしばしば見つかり、このことで親に不安を与えると心を痛めた著者は、「これは米国の子供の発達をみており、我が国の子供にそのまま当てはめてよいのだろうか？」と疑問を感じる。

そこから人間の発達を、生活環境との関連から調べることが始まる。そしてここでも著者は「東京都の子供の調査であり、生活環境の異なる地方では違

いが出てくるのでは？」と疑問を持った。

そこでタイトルにある、岩手、東京、沖縄の3つの地域の地域性に注目したのである。結果は国の間のみでなく、日本の中でも地域性が認められたのである。

そこからまた次の疑問が出てくるのである。すなわち「乳幼児期に発達が遅かった子供は学童期にはどのように変化していくのだろうか？」、「三つの地域の差は、成人期にはどうなるのであろうか？」、そして「成人期に至るまでの親との関係はどうなのであろうか？」と次々と疑問を抱いていく。そして結論として、子供の発達とともに、親子関係もダイナミックに変化することが明らかにされていく。

親子関係、さらには最近一般化しつつある分娩に立ち会う夫の家族観にまで調査は進んでいく。このことは、最近の子供の問題、育児の問題、男女共同参画の問題など、何とか良い方向へ進んでいって欲しいという著者の思いがあるのではないだろうか。

次世代の親たちに育てられた子供達は、どんな発達をするのだろうか。著者の人間発達に対する興味は尽きないようである。

(A5版 頁240 定価(本体3,600円+税) 1998 ミネルヴァ書房刊)